

第六 条 議場ノ都合ニヨリ其人員ヲ制限スルコトアルヘシ
第七 条 傍聴人此規則ニ違背シタル者ハ退場ヲ命ス

〔大正12年刊「福島県西白河郡会史」抜粋〕

〔解説〕 明治三〇年一月二〇日、第一回臨時郡会が白河町関川

寺で開会され、会議規則傍聴人取締規則など決定された。

各町村組合は郡会として大正一三年郡制廃止まで続く。

九六「矢吹の村々から選出された郡会議員名簿」

選挙区及議員ノ定数

（白河町四名 西郷村二名他各村一名で計二四名で議長には郡長があつたがのち互選である。）

矢吹の村々から選出された議員

矢吹村 中畑村 三神村

明治三〇年一月 大野喜次郎 小針東五郎 円谷 善助

〃 三二年一月 大野喜次郎 岡崎長次郎 円谷 善助

〃 三六年一月 大野喜次郎 蛭田倉之助 丹内忠太郎

〃 四〇年一月 酒井岩之助 高久 慶吉 渡辺 金藏

〃 四四年一月 矢吹 平司 小針 静雄 渡辺 金藏

大正 四年一〇月 大木 代吉 小針 静雄 酒井寅三郎

大正 八年一月 大木 代吉 小針 静雄 酒井寅三郎

〔大正12年刊「福島県西白河郡会史」抜粋〕

九七「明治三〇年一月郡会議員当選証書」

郡会議員之証

福島県西白河郡三神村

円谷 善助

右者成規ノ資格ヲ有シ正当ノ

手続ヲ経テ西白河郡ニ於テ當

選シタルコトヲ証明ス

明治三十年十一月六日

福島県西白河郡長 飯塚 清 通印

〔中野目 円谷善人家文書〕

2 地 租

九八「明治二年一〇月白河県より御検見先触」

明治二巳十月御検見

先 触

当 県

宇野 勝美

上 下 三人

吉田 邦平

上 下 貳人

近藤権小属

上下 式人

福岡三四郎 外卷人

一人足七人

内 引戸駕籠 卷挺 此人足三人

兩掛三荷 此人足三人

寄竿持式挺此人足卷人

右者警城国石川郡田村郡村々田方為検見別紙廻村順之通り役遣差出候条得其意於村々書面之人足差出無遅緩可継立候且つ検見候請村々者坪刈旧法等可用繩蒔夫々用意無差支様取計且つ昼休弁当持参ニ付湯茶之内手当いたし儀ニ而者旅宿卷軒尤手控ニ候へ者式軒之積り上下九人分旅籠相払候条取賄決而馳走ケ間敷儀致間敷候此先触早々順達留りより可相廻もの也

明治二巳十月

白河県

別紙廻村順

村々 役人

追而内見帳廉絵図者未ダ不出差村方者前々夜泊り迄無相違差出改メ受候様可致候

一其村々先前支配領主より渡し置候免状并ニ皆済目録本紙五ヶ年之以来之処写相添且又別々夜泊り可差出事

一旅籠料之儀者上卷人 卷泊金式朱ト四百文昼半銭下卷人 卷泊

り金式朱式百文

昼者半減依御規則相払候間其旨可相心得候事

竜崎村 成田村 神田村

大畑村 堤村 中野目村

明岡村 明岡新田村

田村郡

栃本村 糠塚村 船田村

小野山神村 飯豊村 櫛山村

吉野村 浮金村 柳橋村

中保村 比向村

須釜分郷

千伍沢村 山新田村 小菅村

北須釜村 南須釜村 母畑村

湯郷渡村 北山村 高田村

内楨村 下泉村 外楨村

塩沢村 中野村 上川辺村

下川辺村 小高村 岩法寺村

栃山神村 川曲村 上道村

下道村 谷田川村 糎田村

石森村 大倉村 新館村

荒和田村 苗作村 丹伊田村

石川郡

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 笠 | 石 | 村 | 森 | 宿 | 村 | 行 | 方 | 野 | 村 | | | |
| 矢 | 吹 | 村 | 矢 | 吹 | 新 | 田 | 村 | 中 | 畑 | 新 | 田 | 村 |
| 中 | 畑 | 村 | 松 | 崎 | 村 | | | | | | | |

外ニ田方二分之御免被仰付難有奉存候

石川郡矢吹宿

庄屋 熊田 勘重郎

(村名は上から下へつづく)

(本町 熊田俊一家文書)

〔解説〕 旧幕時代の諸制度がそのまま継承され、各村々を巡廻し
検見がおこなわれていたことを示す。

九九〔明治二年一二月凶作に付減免願淺川村組四十八ヶ村庄屋

連より白河県へ〕

乍恐以書付奉願上候

岩城国石川郡

淺川町組

四拾八ヶ村

右村役人一月奉申上候私共村々之儀御見分も被為有候通り極山中
辺鄙之場所ニ而往古より余業余力迎も曾而無御座候都而作徳之内

以皆式取賄候土地ニ御座候処慶安度本多能登守様御領分之砌ニ御
竿入有之山野切添一作切焼畑等迄切畑山畑と御名付田畑共不残再
御檢地ニ而多々御改出高出来既ニ無反別等有之村方も御座候仕合
免相石盛之相違余郡より御百姓類外難渋ニ陥リ自然人少ニ相成候
処天明度之大飢饉ニ而必至困窮仕潰し退転之百姓不少既ニ無民家
村方も有之候難郡ニ御座候処榊原式部太夫様御領分砌莫大之御高
引其外種々御手当被成下置徳川様御料ニ相成候而も引続小兒養育
料分家百姓御手当被下切其外嫁聲呼取拝借無利足永年賦并農^外貢^肥
代夫食種^外麦^代等迄年々莫大之御手当筋被 仰付御恩沢之難有義
ヲ相弁奉報御国恩農業一円ニ丹誠仕連々往古之姿ニ立直リ可申運
ニ趣候処天災と者乍申天保度巳申両度飢饉其後引続違作之年柄多
村々委ニ疲勞罷在候処昨年之義従来聞及も無御座候御戦争ニ付郷
夫勤農業相當候一暇も無御座加之田畑共違作仕露命相保可申手段
無御座候者共多く一同嘆息仕候処田畑共貢稅御引方被 仰付其外
郷夫御手当等厚御仁恵ヲ以漸取統候儀ニ御座候然ル処当年之儀夏
中御届申上候通り不順季候打統就中七月十三日大雨洪水ニ而田畑
共悉違作仕種取も出来兼候作物多此上御百姓相統可仕取詰も出来
兼候村々悲歎ニ沈無拋家出他稼等ニ存込候者多分御座候間當時儀
村役人共より種々力添指止罷在候因迫之場合敷敷奉存候尤田方ハ
御檢見被成下置候儀ニ御座候間相当之御引方被 仰付御座候処畑
方之儀前件ニ奉申上候通り之違作ニ御座候処定免御取箇被 仰付

候様ニ而者小前一同難渋至極仕候間先般御引方奉願上候処重々御
利解ニ而願書御下戻ニ相成候間其段一同申聞候へ共当年之儀ハ実
々以凶害之年柄ニ而相統ニ相抱リ候事故慈悲ニ奉再願具候様而
申上候間不奉願恐も奉願上候右難渋之廉々御憐察被成下幾重ニも
御仁恵之御沙汰被成下置候へ者何れニ歎御百姓永統可仕と難有仕
合奉存候以上

明治二巳十二月十三日

石川郡

浅川村組

四拾八ヶ村

庄屋連印

白河県

御役所

〔本町 熊田俊一家文書〕

一〇〇〔明治三年正月前年の願について矢吹村より〕

乍恐以書付奉歎願候

白川郡

石川郡

岩瀬郡

右三郡小前惣代之者共奉申上候者昨巳年貢税正米上納之儀ニ付兼
々村役人ヲ以再々奉歎願候得共逸々御利解而已村役人より申聽候

ニ付先般借宿村辺迄村々小前共歎願之次第申合其御筋江奉難願度
村毎惣小前共打寄種々混談申乍恐 御役人様方右場所江御出張被
成大勢之小前共屯ケ所ニ打寄セ被 仰渡ニ者当御時節柄大勢打寄
候儀者何故之儀逸々御糺ニ相成候ニ付右場所歎願次第奉申上候処
左様之儀ニ候へ者安石代上納者勿論来ル午夫食指支之者江者夫々
御手当等迄右御役人様方上ニ而精々御手配御救助筋被下成候様厚
キ御利解被 仰出一同難有相心得大勢之御百姓速ニ帰村御沙汰相
待罷在前後弁モ無之小前共一筋ニ御聞濟者顯然儀と奉存候処去十
二月中村々役人共江尚又御詮義之上蔽重之御利解村毎役人共精々
利解申論候様則御書下ケ以被 仰達候趣村々役人共より再応小前
共江半論候処一同奉驚入候右者大勢之小前共最早御聞届者勿論之
儀窮民之者相撰夫食御手当等可願出夫々心組之所前書御利解之段
幾重ニも奉驚伏候且当正中銘々祝賀も相慎ミ大勢小前共途方暮
罷在候仕合此上歎願之方便も無御座第一農業之手配も無之空敷小
前共夫而已心痛中ニ者退転之者も多分出来可申且ッ銘々当老ヶ年
之取凌方ニも困迫罷在候仕合実以奉存歎敷勿論先塙御支配所村々
之儀者何れも隣村ニ入込居年来之間羨敷相心得罷在候所前小名浜
御支配之節塙付村々同様安石代上納被 仰付其後白河民政佐久山
様郷取締右同様安石代上納被 仰付村々小前共志願罷在候通り自
然相叶莫恩之御慈悲と奉存数ヶ村柄立直り此上御百姓精々夫々新
聞等も相目論見連々塙付村々同様ニ基キ可申且 御一新之御時節

ニ至り候へ者此上之御慈悲と愚味百姓共相心得罷在候無其甲斐空敷小名浜并佐久山様之御取箇之儀不殘御取用無之從前之定額ニ相戻し不存寄半石半永之御上納被 仰付奉驚入候全先塙御支配所村々之儀者何れも村勢宜敷私共村々と者墨白之相違と奉存既ニ當時面々所持之有穀も相増候へ者顯然之義と奉存候右元塙御支配下村々当私共村々引竟之上相書溜之御慈悲奉願上候此上大勢之百姓共之内万一ニも心得違仕出し刺御手数ニ罷成候而者奉恐入候間何卒最前村役人共より奉歎願候通り私共村々之儀戰爭場所ニ御座候得共未タ兵乱之愁難去極難渋ニ落入右心苦相除キ村々行立候迄厚キ御天恵之以御憐愍昨巳年より未年迄三ヶ歳之間安石代上納御聞濟被下成置候様奉願上候右願之通御下知被 仰渡候へ者永世之御恩沢と御百姓精々可仕候間私共迄召連其御筋江前件歎願之次第逸々被申立御慈悲之程奉願上候以上

明治三巳午年正月

前書之村々小前惣代之者共罷出頻ニ歎願仕度段申出御座候ニ付是迄幾応教訓理解申論候得共慈悲取継具候様於私共も不奉願恐再応奉歎願候段重々奉恐入候得共慈悲歎之心苦申出ニ付不得止事取次奉願上候前条難渋之廉々御堅評之上出格之以 御讚談ヲ御下知奉願上候右願之通り御聞濟被下置候へ者小前共者勿論私共迄重々莫難有仕合奉存候以上

一米百四十四石四斗九升五合 矢吹宿

内米七十二石二斗四升七合五勺

後三分五厘

米四十六石九斗六升壹合 米納分

前六分五厘

米二十五石二斗八升六合五勺 石代分

代永八十八貫五百拾文三分

米十四石九升四合 矢吹新田村

内米七石四升七合

七分五厘米五石二斗八升五合 米方納分

貳分五厘米老石七斗六升二合石代分

代永六貫百六十七文五分

米納之内払下直段

金一兩ニ付

米二斗八升五合六勺九錢

〔本町 熊田俊一家文書〕

一〇一〔明治三年七月白河県へ矢吹宿より拝借米願書〕

(表紙)

「午七月

御 払 米 願 書

石川郡矢吹宿 〱

乍恐以書付奉願上候

一御払米七十五俵 但耆俵四斗五升合積

此代金

内

三分一

金

当金上納

三分一

金

八月上納

三分一

金

九月皆納

当宿之儀ハ難決者多ニテ穀物畜置候者更ニ無之候ニ付御用方ハ勿

論諸御藩御通行節御休泊御賄方飯米ニさし支当惑罷在候ニ付無廻

奉願上候ハ何共奉恐入候得共前書之石数拜借仕度奉願上候御返納

之儀ハ前書月割之通聊相違無御座候何卒本格之以 御慈評右奉願

上候通 御聴濟被成下置候ハハ難決者共ハ勿論於私共難有仕合奉

存候以上

明治三年七月

石川郡矢吹宿

百姓惣代 兵 四郎 ㊦

組頭 仁右衛門 ㊦

同 卯左衛門 ㊦

同 庄屋 勘十郎 ㊦

同 嘉 助 ㊦

白河県

御 役 所

〔本町 熊田俊一家文書〕

解説

明治二年戊辰の戦いの傷跡も生々しく、さらに凶作で難決し減免の願を四十八ヶ村庄屋連名で出し(九九)さらに矢吹宿から歎願書が出されている。政治体制の不安定と加えて生活の困難など混乱の情況が知れる。

一〇二〔明治五年八月太政官布告(税制)〕

各府県貢米之儀田方ハ正納畑方ハ最寄市町十月上米平均直段ヲ以テ石代ニテ相納田方之分金納相願候而者其年十月中納所相場ハ管下上米直段ヲ加平均ヲ以テ石代金納之管去年末五月中相違置候処右石代直段何ヲ経相決候迄ハ村ニ收穫之米品凡石数ヲ量備置候ニ付遠隔之國々ニテハ自然痛米欠減等ハ出来其上納証書付差出方定期を過候得者石代納之手筈も正納与相換リ其外多少不都合之次第も有之ニ付今船僉議之上当壬申年ヨリ以来田方畑方貢米ハ勿論雜稅米ニ至迄其所最寄市町十月朔日ヨリ十一月十五日迄日々上米平均直段ヲ以テ金納之儀相願候者者聞届候事

一米之外粃大小麦大豆荏菜種粟黍稗其外ニ雜穀ハ其所最寄市町十月朔日ヨリ十一月十五日迄日々上品平均直段ヲ以テ石代金納可致事

但シ夏稅ノ雜穀納之分土地ニ寄リ夏納有之分ハ從前納期月之前月朔日ヨリ納月十五日迄最寄市町平均直段ヲ以テ上納候儀与可相心得事

一從前金銀不融通之土地ニテ石代上納難致段相願候分ハ米納可申付事但シ正納之分回漕取扱之議者不日委細可相達事

一石代納正納之員數仕訳書取調十一月晦日限り可差出事 本年ヨリ願ニ因リ所相場石代金納被 仰付候而者皆濟期限之儀前紙之通改正候事

一從前夏納之分ハ九月皆納濟可

一年限ヲ以テ地扨開届置候分並旧来安直段定石代ヲ以テ相納候分本年ヨリ悉皆廢止候事

右之通相定候事

壬申八月十二日

太政官
〔本町 熊田俊一家文書〕

一〇三〔明治五年九月太政官布告（稅改正）〕

一田畑定金納定永納等閑東畑永之類從前貨幣品位高貴之時相定候分ハ方今ニ至リ米納之貢額ト較候而ハ格別偏輕相成不公平ニ付

本年より一般改正之積被 仰出候条府県ニ於テ相当之増稅之見込相立当月限租稅察江可申立事但稅法一般均一有之候様トノ御趣意ニ付兼而管内一も触示人民疑惑無之様説論可致事

壬申九月十三日

太政官
〔本町 熊田俊一家文書〕

一〇四〔明治五年十一月福島県令よりの論告〕

論告

前書之通被 仰出候処抑我々日本之御国者開闢以來諸国一樣ニ天子様之御直被ニて銘々共持チ伝へ候田畑山林も夫々

天子様より御預被下置御年貢差上来リ候得共保元平治之頃より武

家之政事と相成數多大名共国々を押領し勝手勝手と取扱ひ諸事之

申定より賞罰之施行筋に至迄国々皆以テ区々に相成就中貢稅之儀

者種ニ之唱ひヲ以テ非常に重ク取立候而茂之有又有間敷ニて非

常ニ怪しく取立候者も有之同じ日本国之百姓共に候得共村ヲ隔テ

軒ヲ並シ 苦案の相違有之候儀ハ是迄銘ニ其見聞之通ニ候然ルニ

頃と世の有様も相換り外国御交際之儀相始リ万里ヲ隔たる国ニて

已ニ御条約も被為結候上者 是之通国々村々まち／＼なる御取扱

ニテハ御国字之御立行も覺束なし海外よろづの国ニ被為對御国辱

にも可相成ニ付遂ニ封建之制度を被為廢八十余州之人民共一樣平

均之御世話を奉蒙候様被 遊候難有御趣旨ニ而取間敷シテ取来リ

候者収むべくシテ収ざる者皆式御改正是又全国平等ニ被為掃度より御一新之際御物入之御多端なるをも不被為厭助郷を廢し関所役を止免六尺給米等を除キ貢米金納を被許其他是迄藩々國々ニテ取立来り候雜稅中御廢止ニ相成品質不少御恩沢之万民に下る其数不可枚挙奉恐入御事候サレバ

朝廷に於テ重歛苛収之御趣旨に者毛頭無之候へとも収むべくシテ収ザル者其儘ニ相成居候てハ日本一様之御制度ニ相戻り又従前之まち〱に立返り候ニ付既ニ甲州之大切小切関東之畑永等に至迄一式御廢止ニ相成次第ニ候当県下貢納半高之七石代或ハ三石式斗三石七升式合等之安石代も往昔金銀之品位高貴之砌其節之米相場ニ比較して相定置候ものニ可有之処万国御交際以來彼ノ国と我ケ国と金銀之品位引違ひ居候而其御国之大害ニ相成候より追々万国並合之品位ニ相成随而諸品之直段茂自然ニ改正致候ニ付被仰渡を奉待上候迄も無之至当相場を以テ上納可致ハ当然之事ニ付当壬申年より管内六郡半石半永之旧貫一切令改正候条共段可相心得候小前末々相成候てハ日用之衣食住さへ相調へ兼ね飢寒ニ苦み居候者も不少実以テ不忍次第に候得共異々も申聞候通一視同仁之御制度至当之御条理に候へバ人民一同厚く古今沿革之世態を勘考シ深ク全国平均之

朝旨を奉載可致事

壬申十一月

福島県令 安場 保和

〔本町 熊田俊一家文書〕
〔解説〕 明治四年の廢藩置県によつて明治新政府は、名実ともに統一的中央集権支配の基礎を築くことになる。明治五年から六年にかけてその整備を急ぐが貢税についても、金納制への布告が出され福島県は論告を出している。明治六年の地租改正条例によつて全金納化がはかられることになる。しかし実施はおくれる。

一〇五〔明治八年福島県地租改正人民心得書〕

〔表紙〕

地租改正人民心得書

告諭

明治六年七月二十八日被仰出候地租改正御旨趣之儀ハ、従前租稅之賦課一様ナラス寛ナルモ有リ、苛キモ有テ一方ハ輕ク、一方ハ重ク甚タ不公平ナル事共多々ナリ、維新ノ今日ニ至リテハ万機皆太政官ニ統へ、各地方一途之御政道ニ帰セラレ候ハ申迄モナク衆庶之知ル処ニ候、抑租稅ハ全国ノ費用ナルモノニシテ最大切之用途、一日モ欠クヘカラルサルモノ也、皆是レ全国人民務ムヘキノ義ナレハ、宜ク宿弊ヲ洗ヒ賦課ノ方法正中ヲ仰クヘキ事ニ候、従前檢地ノ法間竿尺度ノ長短アツテ今時間竿ノ称古ト称シ中ト称シ新ト称スルモ皆一坪ナレトモ実歩一様ナラス、加ルニ年歴モ立チ切添切開ノ真敵歩ヲ乱ル上中下用之其地味ヲ變スルモ租稅ノ依然タ

ル、其他荒地亡地ニ其租ヲ弁納スル千差万別、古定法ノ正ト不正トニヨラス、數百年ノ久シキ弊ノ積テ今日ニ至ルモノ人民ニ障礙有ル明カニ知ルヘキナリ、故ニ政府衆議ヲ尽サレ御決定アリシ大洪業ナレハ、人民篤ク相心得尽力可致、且此業ヤ来ル明治九年ヲ以全國一般改正ノ期限ト被相定候旨、殊更ニ本年御達ノ御旨趣モ候ニ付、速ニ従事可致。尤容易ナラサル務ニ候得ハ初ニ着手ノ順序ヲ正シ、調査ノ要ヲ失ハス、無益ノ勞費アラサル様可心掛事肝要ナリ、之レニ依テ別ニ条件ヲ書シテ相渡シ候条、熟読致シ正実ニ調ヲ遂ケ期限ヲ誤ラス成功ヲ遂ク可ク、先ツ左之件々ヲ心得別冊順序速ニ着手可致事、

第一条

一 明治六年第貳百七十二号御布告地租改正ニ付テハ、旧来田畑貢租ノ法ハ悉皆相廢シ、更ニ土地ノ代価ニ随ヒ百分ノ三ヲ以テ地租ト想定メラルムニ付テハ、兼テ渡シ置キ候券面地価ノ義ハ旧来石盛ノ不同ト貢租ノ甘苦ニ寄リ代価ニ高底有之義ニ付、更ニ真価ヲ申立検査ヲ可受管ノ御規則ニ候事、

第二条

一 従前諸費割等ノ内地所ニ課シ来候分地租改正ノ上ハ、総テ其地価ニ賦課シ本税金ノ三分ノ一ヨリ越ユヘカラサル事、

第三条

一 改正条例第二章ニ地租改正施行相成候上ハ土地ノ原価ニ随ヒ賦

稅致シ候ニ付、以後ハ年ノ豊凶ニヨリ賦稅ヲ増減スル義ハ無之尤天災ニ因リ地所変換候節ハ実地取調、其厚薄ニヨリ其年限リ免稅又ハ起返ノ年限ヲ定メ年季中ハ無稅之事、

第四条

一 改正ノ上ハ田畑ノ称ヲ廢シ、総テ耕地ト相唱ヒ家作有之一区ノ地ハ宅地ト称シ、其他ハ其地種ニヨリ名称ヲ附スヘキ事、

第五条

一 地券取調ニ付、去壬申年切添切開隠田等ノ類此度限一切被差許候旨御布告有之、開墾地タリトモ既ニ作付出来候分ハ、地代金上納ヲモ被差免候義ニ付、是迄書上漏ノ分ハ無之管ニ候得共、若シ漏レ落等有之ハ有体可申立、万一地租改正ノ後ニ至リ、隠步等有之ニ於テハ其律ニ照シ御処分相成候条、心得違ヒ有ル間敷事、

第六条

一 従前用來候反別ハ往古檢地、或ハ名寄帳等ニ依リ候事ニテ、檢地ノ法方種々古今一樣ナラサルハ申述置候通ニ付、現今有スル処ノ全クノ実歩ヲ更ニ丈量ヲ遂ケ候義ニ付夫々調方心得書致シ相渡候条、精密ニ検査ヲ可受事、

第七条

一 地所ノ名称區別ノ義明治六年三月第百十四号御布告有之候処、七年十一月第百二拾号ヲ以テ御改定御布告ニ相成候義ハ人民心

得アル通ニ候ヘトモ、尚改正追加等モ有之候ニ付、一目シ易キ
様集メ左ニ掲ケ候条、地種委シク可相心得事、

官有地

第一種 地券ヲ発セス地租ヲ課セス区入費ヲ賦セサルヲ法トス、

一 皇宮地 皇居離宮等ヲ云、

一 神地 伊勢神宮山陵官国幣社府県社及ヒ民有ニアラサル社

地ヲ云、

八年七月二日公布ニテ改リタル分

第二種 地券ヲ発シ地租ヲ課セス区入費ヲ賦スルヲ法トス、尤府

県所用地ハ地券ヲ発セス唯帳簿ニ記入ス、

但、此地ニ在ル官舎ヲ貸渡ス時ハ借地料ヲ賦スヘシ、

一 皇族賜邸

一 官用地 官院省使寮司府県本支庁裁判所、警視庁陸海軍本營、

其他政府ノ許可ヲ得タル所用地ヲ云、

第三種 地券ヲ発セス地租ヲ課セス区入費ヲ賦セサルヲ法トス、

但、人民願ニヨリ右地所ヲ貸渡ストキハ、其間借地料及

ヒ区入費ヲ賦スヘシ、

一 山岳丘陵林藪原野河海湖沼池沢溝渠堤塘道路田畑屋敷等、其

地民有地ニアラサルモノ

一 鉄道線路敷地

一 電信架線柱敷地

一 燈明台敷地

一 各所ノ旧跡名区及ヒ公園等民有地ニアラサルモノ

一 人民所有之権理ヲ失セシ土地

一 民有地ニアラサル堂宇敷地及ヒ墳墓地

一行刑場

第四種 地券ヲ発セス地租ヲ課セス区入費ヲ賦スルヲ法トス、

一 寺院大中小学校説教場 病院貧院等民有地ニアラサルモノ

民有地

第一種 地券ヲ発シ地租ヲ課シ区入費ヲ賦スルヲ法トス、

一 人民各自所有ノ確証アル耕地、宅地、山林等ヲ云、但此地売

買ハ人民各自ノ自由ニ任スト雖モ潰シ地開墾等ノ如キ大ニ地

形ヲ変換スルハ官ノ許可ヲ乞フヲ法トス、

第二種

一 人民数人或ハ一村、或ハ数村所有ノ確証アル学校病院郷藏牧

場秣場社寺等官有地ニアラサル土地ヲ云、但此地売買ハ其所

有者一般ノ自由ニ任スト雖トモ、潰地或ハ開墾等ノ如キ大ニ

地形ヲ変換スルハ官ノ許可ヲ乞フヲ法トス、

第三種 地券ヲ発シテ地租区入費ヲ賦セサルヲ法トス、

八年七月二日公布ニテ改マリタル分

一 官有ニアラサル郷村社地及ヒ墳墓地等ヲ云

八年十月九日公布ニテ追加ニナル

一民有ノ用悪水路溜池敷堤敷及井溝敷地
右之通相達候事、

年月日

福島県

人民心得書目

第一章 二十四条

反別調之事

第二章 四ヶ条

絵図之事

第三章 十三ヶ条

地価之事

第四章 四ヶ条

収穫之事

以上

人民心得書

第一章

反別調査之事

第一条

一 地租改正ニ付テハ、土地ノ広狭ヲ量ルト落地域ハ重複等ノ事ナ
キヲ肝要トス、村方ニテ初メニ此調査ヲ誤リ又疎漏ニ出ルアル
時ハ実地ノ検査ヲ受クルニ当テ調ヘ直シヲナスヤ其度ヲ重ヌル
ニ至テハ、費用ヲ倍シ時日ヲ消シ徒ニ無益ノ労費ヲ招クニ付、
最モ念入可取調、出来ノ上ハ別紙雛形ノ振合ニ倣ヒ字限り地図
ヲ製シ、而シテ一村ノ総絵図ヲ可仕立事、

第二条

一 実地ヲ丈量スルニハ村吏立合各自持地ニ畝杭ヲ建テ隣地持主ト
モ申合セ耕地ニ臨ミ、経界ヲ正シ耕地一筆毎ニ畦際ヨリ打詰、

縦横ノ間数ヲ正シク丈量シ、屈曲アル形チハ総テ十字法ニヨレ

ハ入歩出歩等見計ヘ銘々持地限り現在ノ形状ヲユカキ屈曲ヲ平
均シテ縦何間何歩何厘、横何間何歩何厘ト間数等出ス可シ、然
レトモ地形ノ屈曲種々ノ変形アレハ歩数ノ差異ヲ免カレス、故
ニ成可ク板分間等ノ法ニヨリ現反別ヲ算出ス可キ事、

第三条

一 丈量ノ節耕地ニ属スル大小ノ畦畔ハ相除キ水溜等ノ都合ニヨリ年々適
リニア、一筆毎ニ取調ラサル様取調フヘシ村吏ヘ差出村吏ニ於テハ右
ヲ以テ実地ニ臨ミ、持主等立合ノ上再ヒ歩数ヲ改メ畝杭ニ更正
ノ反別ヲ記載シ字限り地図ヲ仕立可申事、

但、畦畔ハ其地ニ所属ノ義ニ付、将来便宜ノ為取潰シ耕地歩数

増加候節ハ届出券面書替ヲ受候義ト可相心得事、

第四条

一 畝杭ノ義ハ規則ノ通所持ノ地所エ一筆毎ニ建テ、地位ノ等級及
反別何程田数何枚番号持主姓名ヲ記載ス可キ事、
但、畝杭ハ成ルヘク丈夫ナルヲ相用、一筆数畦ノ分ハ其枚毎
ニ猶小杭ヲ建、何番ノ内^イ縦何間何歩何厘
^ハ横何間何歩何厘
載シ、後來紛敷無之様可致、尤実地判然タル地所ハ小杭ヲ立サ
ルモ可ナリ、

第五条

一 間竿之義従来各種ノ間竿用ヒ来リ、当管下ニモ六尺五寸、六尺

三寸等種々有之候処、改正ニ當ツテハ一般六尺一分ノ砂摺加フ竿ニ定メ、宍反三百坪ト相改メ丈量ヲ遂ヘキ規則ニ候、是レハ人民ノ利害ニ關係候義ニモ之レ無ク、全ク度量變更マテノ義ニ付疑念アルマシキ事、

第六条

一六尺竿ヲ以テ現歩ヲ丈量スルニ縦横共ニ間已下ノ尺度ハ三寸ヨリ五尺七寸迄、三寸ヲ倍ス毎ニ六除ノ數ニ適セサルハ都テ捨ヘシ、縦ヘハ左ノ如シ、

四寸ヲ得ル時ハ一寸ヲ捨ツ、即チ三寸、

五寸ヲ得ル時ハ二寸ヲ捨ツ、即チ三寸、

五尺八寸ヲ得ル時ハ一寸、五尺九寸ヲ得ル時ハ二寸ヲ捨テ、

五尺七寸トナスカ如シ、

反別ヲ計算スルニ宍歩未滿ノ端歩ハ切捨ヘシ、尤一筆ノ内ニ三ニ裁量セシ分ハ一筆合計丈ニテ切捨ヘシ、

第七条

一筆トナス可キ耕地広ク且異形一繩ニ亘リ難キハ二三ニ裁量スル適宜タル可ク、且數筆ノ地所持主人ニテ地統ノ分ハ願ニヨリ連結スルモ苦シカラス、然ルトキハ新規一筆ノ番号ヲ附ス可キ事、

但、道路ハ勿論小径或ハ溝渠ノ類ヲ隔テタルハ、小畝歩ト雖一筆ト致候義ハ不相成候事、

第八条

一宅地ノ外ニ道溝ヲ隔テ土藏物置場等ノ類建設有之ハ、宅地ヲ二筆ニス、又宅地ノ四方ヘ土手ヲ回シ外郭掘ヲ構ヒ置ク等ノ類水ノ有無ニ不拘宅地ニ籠メ取調ヘキ事、

第九条

一宅地中ニ往來道或ハ用水路等アルハ其步數ヲ除キ、本地ノ外書ニ步數名稱ヲ記載スヘシ、尤一戸ノ用ニ供セン為メ分流ヲナシ或ハ一已ノ便ニ設ル小径ハ総テ本地ニ籠メ可取調事、

第十条

一元田畑ニテ有税地タリトモ現今山林、草原ニ變シ、将来起返スヘキ見込ナキ深荒ノ分ハ旧稱ヲ除キ現今ノ地種ニ相改メ、其訳帳簿ニ記載ス可ク、是レニ反シ元高外ノ地ト雖現在田畑ノ分ハ、耕地ノ部ニ加ヘ可取調事、

但、現今ノ地種ニ改候上ハ其地ノ利潤ヲ量リ、相当ノ地価取調可申出事、

第十一条

一地所ノ番号ハ実地ノ順序ヲ明了ニスル為メナレハ都テ見易キ様附スヘシ、依テ一村中道路、河川、堤塘及畦畔、溝渠等ハ経界ヲ判然取調、此分ヲ番外ニナシ実測ヲ要スルニ及バズト雖、從前其幅員等記録有之分ハ其旨記シ置ク可ク、其他土地ノ名稱何種類ヲ論セス、官地民地ヲ問ハス一筆限リニ附スヘシ、尤全村

押番号ニテハ調査ノ度狂ヒ等ヲ生シタル時全地ノ番号ニ響キ不
便ナレハ、字限ニ一筆毎ノ順番ニスヘシ、

第十二条

一 道路、堤塘等、凡定リタル幅員アル可シ、若シ其幅員ヲ犯シ、
耕地ニ切開或ハ宅地ニ囲タルモノハ其步数ヲ旧道敷堤敷ニ復シ
耕宅地ヲ取除ク可キ事、

第十三条

一 地先等ニ有之小歩ノ草生地、竹木生地、或ハ溜池冷水地等ノ分
別段廉立難キモノハ其本地ニ組入、反別腹書ニ何歩何生地ト記
シ可申事、

第十四条

一 一人一已所有之墓地タリトモ無税相成候義ニ付、区画ヲナシタ
ル分ハ従来一筆ノ内ト雖モ、其步数ヲ区分シ可申立事、
但、田畑宅地山林中ニ一二散在区画判断不相立分、及瑣々タ
ル墳墓ハ本地反別ノ外書ニ墓地何歩ト記載可申立事、

第十五条

一 耕地宅地中ニ在ル小祠堂塚ノ類、民有地ノ分ハ本地一繩ノ内ニ
取調、村内路傍等ニ有之官有ニ非サルモノハ普通民有地ノ積取
調可申事、

但、官地ノ分ハ反別ノミ取調ヘキ事、

第十六条

一 社寺境内地有税無税ニ不拘、民有ノ分ハ普通ノ宅地同様地価取
調税納ト心得、官有ノ分ハ反別ノミ可取調事、

但、郷村社ハ民有地ト雖トモ除税ノ事、

第十七条

一 人民所有ノ無税山林等ニ建立ノ社地ハ郷村社已上近傍宅地ニ比較
シ賦税ノ筈ニ付、従前区域アルモノ、又ハ区域判断セサルモノ
ハ此度更ニ区画ヲ定メ、別筆ニ反別地価取調可申事、

但、小歩ノ小社ハ成ル丈ケ合併ヲ要スト雖モ、合併ナリ難キ
分ハ別段区別ニ不及事、

第十八条

一 甲村ノ地所乙村内へ飛地ニ相成居ル分ハ両村示談ノ上、甲地ヲ
除キ更ニ乙村ノ反別ニ組入取調可申、都テ簡便ヲ旨トシ従前地
所ノ互ニ錯雜シテ不都合ナル地景ハ甲へ附スルモ乙ニ与フルモ
其便宜ヲ要シ後来紛紜ナキ為ナレハ、宜シク相議シテ無益ノ争
論アラサル様心得ヘク、尤示談整ヒ地所ヲ交換及ヒ属地セシム
ルハ其訳ケ双方ヨリ連印ニテ略図相添可願出事、

但、本条示談ナラサルハ乙村ノ絵図ニハ其飛地ヲ色分シ、甲
村ニテハ別ニ飛地丈ケノ絵図ヲ製スヘシ、尤甲村ハ反別総計
上内何程乙村へ飛地ト朱書シ番号ハ母村ノ末ニ加フヘシ、

第十九条

一 実地丈量下調済之上ハ別紙雛形ノ通り野取帳ヲ製シ一筆限リ地

位ノ等級ヲ分チ^{田畠六十等以内宅地ハ五、}右調査終リ帳簿図面トモ差
出候村方ハ不都合無之ニライテハ直ニ実地検査トシテ官員派出
可致、反別確定ノ上ハ地価帳編製ノ順序ニ各致事、

第二十条

一 広漠ノ山林ニテ反別難取調分ハ四至ノ境界ヲ詳記シ、凡反別何
程ト可申立事、

但、東ハ字何耕地、西ハ字何山、南ハ字何川、北ハ字何野境
ト記スノ類、

第二十一条

一 是迄高内引ノ荒地ハ規則ノ通り年季中無代価券状相渡候ニ付テ
ハ、従前賃租弁納致シ来候分ト雖トモ損害ノ厚薄ニヨリ更ニ可
起返難易ヲ量リ年季ヲ定メ、年季中無税相成候ニ付、川欠川成
等ニテ旧地ノ形状ヲ失ヒ、反別難改分ノ外ハ生地同様現步数ヲ
取調可申立事、

但、川欠川成石砂入等ニ成タル地形ノ分、方今可起返見込無
之モ先ツ以テ十年已内ノ年季ヲ附シ候義ト相心得、且地形ヲ
失ヒ反別難改分ハ先ツ旧反別ヲ以可取調、尤起返ノ見込ナク
シテ上地ヲ欲スル向ハ其旨可申出事、

第二十二条

一 新開場畝下半年季中ノ分ハ其年季中無税ノ筈ニ付、実地反別ノミ
取調帳簿上腹書へ畝下半年季ヲ附シ可置事、

但、従来多クハ、反別ヲ用へ來ルニ付、此際更ニ現歩ヲ量リ
可申事、

第二十三条

一 民有ノ山林原野ヲ誌ニ開墾セシ者ハ其素称ニカムワラス総テ所
持主ト相定可申事、

但、従前官林官山或ハ用地附屬地官簿ニ記載ノ地所ヲ切添切
開セシ者、当初許可ヲ受ルト受ケサルトヲ論セス差支無之分
ハ、其者所有地ニ下ケ渡スベク条、相当代価ヲ以テ払下願出
ヘク事、

第二十四条

一 山野秣場或ハ池沼等ノ教村ニ跨リ従来径界無之入会之地ハ番外
ニイタン、其入会ノ教村吏連印之上別段図面ヲ仕立可申事、

但、官民有之區別不相立向ハ伺出ノ上區別相立可申事、

第二十五条

一 従来往還並木敷道敷及河川敷等ニ掛ケ家屋建築候分ハ、全部宅
地ニ取調候義ハ不相成筋ニ付、右敷地之分ハ官地拝借ト相心
得、借地料上納之積リ、尤將來差支無之分ハ相当代価ヲ以家屋
建築之者へ払下候条、取調可願出事、

但、以來並木敷道敷へ家屋建築致候義不相成旨、内務省達之
趣モ有之候ニ付、心得違致間敷、且従前田畑ニ切添致候分ハ
原地ニ引戻候義ト可相心得事、

第二十六条

一各村実地調査之際隣村境界ハ双村々吏互ニ立会、重復脱地等無之様注意可取調事、

但、隣村境界ニ官有地相挟リ從來双村入会等之名義ニテ村界不明了之分ハ、更ニ境界相定可申、若不得止事故有之、難定地所ハ第二十四条之通可相心得事、

第二章

繪図弁筆入法之事

第一条

一地図ノ製全地ヲ測量シ其實積ヲ管出分間トナスニ及ハスト雖、其地ニヨリ屈曲或ハ種々ノ變形アレハ成ル可ク板分間ヲ以一筆限其地形ヲ取、仮令見取図ト雖トモアル可ク歩數多、少ヲ量リ現形ヲ失ハサル様致ス可シ之ヲ字限繪図トナシ、又一村惣繪図ヲ製ス可シ、

但シ惣繪図ハ字区界ノミヲ画ク可シ、

第二条

一繪図ノ製ニ至テハ第一条ノ訳ニ付、各村全図分間施行ヲ必スルニ非ラスト雖モ、分間ニ相成ル分ハ其寸間一樣ニ涉ラサレハ不都合ニ付、左ノ心得ニテ可取調事、

一一村全図ハ 十間ヲ以テ曲尺一分トス、

一字限図ハ 一問ヲ以テ曲尺一分トス、

但、分間ニ涉ラス見取ニナルモノ其寸間ハ難期ナレトモ広狭見計ヒ此ノ寸間ニ見合セテ製スルヲ好トス、

第三条

一一村繪図字限リニ何番字何ト記載スヘシ、但シ字限リ地図ハ一筆毎ニ縦横ノ間敷反別持主姓名番号ヲ記入ス可キナレトモ調直シ等ノ度コト煩勞ナレハ、略シテ番号ノミヲ記スヘシ、

第四条

一繪図ノ雛形

第三章

第一条

地価之事

一反別ノ調査地図調出来候上ハ、従前ノ檢地帳簿及貢稅割付帳等ヲ以テ現今ノ反別ニ比較シ其ノ増減ヲ調ヘ、向後実地ノ景状ニ応シ地価ヲ見積リ、雛形ノ如ク帳簿ヲ製シ可差出事、

第二条

一地価ノ儀最前ノ券面地価ハ旧來石盛ノ不同貢相ノ甘苦ニヨリテ高低有之義ニ付、更ニ地価ヲ見積ノ御規則ニ付、先ツ一歳ノ收穫高直作（定と）ノ別（畑）ニ付、一反歩ニ付何程ト正実ニ其採リ上リ高ヲ調ヘ、其内地主所得ニナルヘキ米金種脂代一割五分新稅即チ地価百分ノ三村入費地租三分ノ一等ヲ引キタノ何分ノ利朱ニテ地価何程ト算出スヘシ、

第三条

一地価調査ニ用ユル米麦大豆価ノ義ハ、総テ明治三三年ヨリ昨戌年マテ五ヶ年間平均ノ御規則ニ付、追テ確定ノ上可相違事、

第四条

一 都テ宅地ハ收穫ノ品類無之勿論ニ付、市街宿駅等ハ貸地料弁充買代価等反歩ノ所得何程ヲ積リ可取調、郡村宅地ハ本村耕地反歩ノ地価平均或ハ隣地ニ比較シ參酌相当代価ヲ積ルヘシ、

但シ一村ノ内山川ヲ隔候宅地ニシテ不便ナル等ノモノハ其最寄ノ耕地ヲ平均シ価格ヲ定ムルモ可ナリ、且往還筋等ニテ商業ノ便宜アル場所ハ耕地ノ平均或ハ隣村比較ノミニ不拘、

第五条

一 温泉場ハ湯錢其他一歳ノ収利ヲ積リ、而シテ地租村入費浴場修繕等ノ入費ヲ引キ、残リヲ以テ額トシ一場ノ地価ヲ定ムヘシ、
一場ノ反歩ヲ積ル尤温泉ノ為メ一区ヲナシ便宜アル等ノ宅地ハ市街ニ準シ地価可取調事、

第六条

一 池沼ノ類持主有之水草魚鱉等ノ利潤アルモノハ一歳ノ収量ヲ積リ相当地価ヲ定ムヘシ、
(カサメ)

但シ荒地ノ名義ニシテ其実池沼ニ相成居ル分ハ、本条ニ照準

可取調事、

第七条

一 田畑ニテ第一章第十條ニ有ル如キ山林草原等ニ変換シタル分、其地相当ノ地価ヲ見積ルヘシ、

第八条

一切替畑焼畑等年々作付セサルモノハ其作付ヲセシ年ノ收穫ヲ積リ、年々ニ假令ハ五ヶ年ノ内三年作付セス二年ノ收穫ヲ得ル如キハ其收穫ヲ五ヶ年ニ割合スル也割合地価ヲ積ルヘシ、

第九条

一 民有ノ山野林藪等地価積リ方ノ義ハ従前税ノ有無ニ不拘、其地相応蕃育スヘキ物品ヲ視察シ、凡ノ収利ヲ見積鬱ハ立木生植ノ年ヨリ伐採ノ年迄平均割付、猶下草或ハ茸類等ノ収益ヲ見積ル尚近傍売買代価ヲモ照合取調可申立事、

第十条

一 郷藏其外学校、病院ノ類是迄無税ノ地ト雖トモ人民共有スル者ハ宅地同様心得、都テ其他ニ応シ第四条ニ照準地価可取調事、

第十一条

一 田畑林藪原野等ノ官有地ハ地価見積ルニ不及、反別ノミ帳簿ニ記載スヘシ、

但、山林等ノ内嶮岨ノ場所ニテ従前反別未学ノ分ハ、漸次点檢ノ積リヲ以テ山林一ヶ所ト記載シ置キ経界ヲ詳記シ置ヘシ、

第十二条

一 川縁堤外等ノ不定地ハ何不定地凡反別何程ト記シ相当ノ地価相定ムヘシ、

第十三条

一 土地一歳收穫ノ米金ヲ見積、第二条ノ通り取調持主限り各地見

込ノ收穫地価ヲ申出サセ、村吏調査ノ上、不都合無之ニ於テハ別紙雛形ノ如ク帳簿ヲ仕立、一筆限り持主調印村吏連印ノ上可差出事、

第四章

收穫之事

第一条

一 收穫ハ其地ヨリ取揚ケノ総数ヲ書出スヘシ、尤モ其年々豊凶ニ依テ一定ナラスト雖モ、平年作柄ヲ以テ地味ニ応シ正実ニ書出スヘキ事、

第二条

一 凡收穫品ハ米大豆麦ノ三品トス、尤山間ニテ粟稗ヲ以テ本作トスト雖モ総テ米麦豆ニ見積リ可書出事、

第三条

一 水田ノ内蓮根、慈姑(オシロイ)、蘭草等各種ノ植付有之ハ、総テ隣地米作ヲ以テ比較收穫可取調事、

第四条

一 溪間或ハ冷水掛リノ田地作付候テモ年々実ノリ有無難期、或ハ常ニ必ス早損ヲ受クルノ類、平作ヲ以テ收穫難定地所等ハ、第三章第八條切替畑等ニ照準シ收穫可取調事、

〔国見町史第三卷〕抜粋

〔解説〕 明治六年七月の地租改正条例の公布によって地租改正事業が始まる。同年三月に施行された地券法により、土地私有制

が整備され、地租改正の趣旨を人民に納得させるため福島県では「地租改正人民心得書」を出した。本資料は「国見町史第三巻収録」のものを転載させていただいた。

一〇六〔明治七年地券之証〕

第二十一条

地券之証

磐城国白河郡須乗村之内

同国同郡同村

村受公有地

三十八番

一 郷藏敷四畝歩

此地代金八拾銭

右検査之上授与之

福島県令 安場保和

明治七年五月

少属 桑名 茂三郎 受付

〔須乘 酒井正敏家文書〕

〔解説〕 明治五年土地永代売買解禁令により、旧来の人民所有地を私的所有として認めた証として地券を交付した（壬申地券）

明治六年に地租改正条例が發布され、政府は改租を行った土地に改めて新地券を交付した。本号は前者Ⅱ壬申地券の例であ

る。

一〇七「明治七年七月緝替廢止による矢吹村議定書」

儀定確書

一 当村之儀者往古より五ヶ年限地分ニ仕来居候処今般御改正ニ付永々定持被仰付村内一統反別上下見ならし高下無之候品代価之儀も平均ニ仕永々定持相究メ申候処相違無御座候事

一 川筋池下依場所川欠砂入池普請等出来候節人足拾人迄其施主持拾人より多分之儀へ村内一統ニ而普請仕其施主へ難渋相掛不申候筈且杭木諸道具等迄村方より差出候筈若普請成就仕兼川欠大砂入ニ相成候節ハ右川欠ニ相成候地所同根堰水掛上田ニ而銘々差出其反別通其施主へ所持為致候筈相定申候為後念連印儀定確書仍而如件

明治七年甲戌年第七月

| | |
|---------------------|---------------------|
| 井上林五郎 ^印 | 富永定吉 ^印 |
| 鈴木祐助 ^印 | 井上小右エ門 ^印 |
| 鈴木甚右エ門 ^印 | 古川半之助 ^印 |
| 相良熊吉 ^印 | 古川良助 ^印 |
| 鈴木新之助 ^印 | 橋本清四郎 ^印 |
| 古川良平 ^印 | 古川徳七 ^印 |
| 橋本市右エ門 ^印 | 橋本清三郎 ^印 |

橋本半次^印 古川良五郎^印
古川良七^印 鈴木比佐吉^印

仕長井上弥市^印 仕長橋本徳三郎^印

橋本令之助^印 星徳之助^印

鈴木藤三郎^印 用掛鈴木文之助^印

(名前は上から下へつづく)

[本町 熊田俊一家文書]

解説 地租改正により、幕藩時代から繩替を行ってきたが、一定の土地を所有することになったため、後日のいざこざをなくするための村議定書である。

一〇八「明治八年二月地租改正調査料領收書」

請取証

一金拾円也

右ハ其御村地租調査料之内正奉受取候也

明治八年十二月三十一日

渡辺惣兵衛^印
大野甚三郎^印

中畑郡惣代御中

[中畑 岡崎長成家文書]

一〇九〔明治八年三月地租改正調査方控抄〕

(表紙)

「明治八年 中畑新田村

地租改正方控記

三月十八日ヨリ

改正掛

仙吉

大久保

田数 三枚 立一間行

田 十七

横 立四間五分
三分

枡吉

同人

田 二十二枚 立五間行
横六分行

田 十三

横 立二間五分
五分

仙藏

定三郎

田 十一枚 立一間半
横一間半

田 二十四枚

横 立一間八分
二間五分

万吉

同人

田 十三枚 立二間八分
横七分

田 二十五枚

横立

清次

田 十六 立三間五分
横五分

村人 足書

三月十九日 前郷地江出ル

一字吉

梅吉

金三郎

一忠藏

金五郎

久助

一要吉

新藏

幸藏

一永吉

清五郎

庄七

一清四郎 石藏 仙藏
一新助

二十一人

外二十九日残り之分江二十日 半日出ル

新藏 清五郎 庄七

三人

二十日巻本木口

一石藏 栄助 留吉 弥右エ門

一善太 久助 永吉 幸藏

一佐吉 枡吉 米吉 枡三

一辰吉 忠作 平藏 平三郎

十六人

外二十日残り之分江二十一日 半日出ル

一枡吉 佐吉(代善助) 辰吉 忠作

一幸藏

五人半なり

内辰吉 忠作兩人者残り半日手伝ニ付 従夫札一枚遣え答

二十一日一本木

一弥右エ門 永吉 増三 平三郎

一平藏 巳之吉 栄助 留吉

一新助 金三郎(彦藏代)源治

ノ 十一人

記

一金一步也 繩役江廻ス 梅宮ヨリ

一金一步也 夫てつ 梅宮ヨリ

一金一步也 古川様へ廻ス 梅宮ヨリ

一金一步二朱也 夫てつ 梅宮ヨリ

一金二步也 佐久間よりカリ

一金一円也 梅宮ヨリ

一金三歩也 梅宮ヨリ千吉無□□

一金三朱也 梅宮ヨリかさ代

四月二十五日

一金二分也 同断

ノ 四円六銭二厘五毛

宮川同頭記

三月十八日ヨリ 一人 一本木

一人 内 二十一日

十九日 一人 一本木

一人 前郷地 二十二日

二十日 一人 内 調

二十三日 休 三十日

二十四日 一人 同病氣ニ付断

一人 屋敷 三十一日 休

二十五日 四月二日 一人 内 調

一人 内 調 一人 二日

二十六日 病氣ニ付断 一人 同断

一人 同病氣ニ付断 一人 三日

二十七日 病氣ニ付断 一人 同断

一人 同断 一人 四日

二十八日 病氣ニ付断 一人 五日

二十九日 同断 一人 同断

一人 同病氣ニ付断 一人 同断

用掛 一人 一本木

三月十八日より 一人 一本木

一人 内 二十一日

十九日 一人 休

一人 前郷地 二十三日 休

二十日 一人 休

一人 中畑 二十四日 休

二十一日 休

休

第5編 近代 1政治

| | | | | |
|---------|-----|------|----|-----|
| 二十五日 | 休 | 三十日 | 同 | 断 |
| 二十六日 | 休 | 四月一日 | 同 | 断 |
| 二十七日 | 同 | 二日 | 同 | 断 |
| 二十八日 | 同 | 三日 | 同 | 断 |
| 二十九日 | 同 | 四日 | 北 | 釜 |
| 第三十八日より | 惣代 | 一人 | 五日 | 中畑行 |
| 一人 | 内 | 一人 | 屋敷 | |
| 十九日 | | 半人 | 北 | 釜 |
| 一人 | 前郷内 | 二十日 | 同 | 断 |
| 二十日 | | 半人 | 同 | 断 |
| 一人 | 一本木 | 二十七日 | 休 | |
| 二十一日 | | 二十八日 | 南 | 釜 |
| 一人 | 同 | 二十九日 | 休 | |
| 二十三日 | 内調 | 三十日 | 同 | 断 |
| 二十四日 | 休 | 三十一日 | 同 | 断 |

四月一日 同 断
 四月一日 同 断
 二日 同 断
 五日 一人同所
 三日 同 断

〔新町 佐久間二家文書〕

【解説】地租改正のための耕地調査や丈量は、各村ごとに実施されるが、その費用は村々が負担するようになっていた。前号は中畑村の調査料の領収書で、費用の一部である。

「地租改正万控記」は調査のための人足などの控である。政府は土地丈量や地価評定を官の指導のもとに直接人民に行わせる方針だったようである。

一一〇〔明治一一年地券〕

明治九年改正 地 券

〔磐城国白河郡中畑村字本村百三番

同国同郡同村

持主 富 永 仙 蔵

一畑三畝十七歩

地価一円三十八錢一厘

此百分ノ三金四錢一厘

明治十年ヨリ

此百分ノ二ヶ半金三錢五厘

右検査之上授与之

地 租
 地 租

明治十一年十月二十日

福島県印

(裏書)

日本帝国ノ人民土地ヲ所有スルモノハ必ラス此地券状ヲ有スベシ

日本帝国外ノ人民ハ此土地ヲ所有スルノ権利ナキ者トス故ニ何等ノ事由アルトモ日本政府ハ地主即チ名前ノ所有ト認ムヘシ
日本人民ノ此券状ヲ有スルモノハ其土地ヲ適意ニ所有シ又ハ土地ヲ所有シ得ヘキ権利アル者ニ売買譲渡質入書入スル事ヲ得ヘシ

売買譲渡質入書入等ヲナサントスルモノハ渾テ其規則ヲ遵守スヘシ
シ
ルモノトス

〔解説〕 壬申地券(一〇六)が土地の売買・質書入の法的保証が十分でなく、私物所有権の証としての性格が必ずしも明確でなかったのに対し、地租改正後発行した新地券は、人民の所有権を明示し権利を固くするものであることを強調した。明治一九年登記法が実施されるまで土地の所有権を示す唯一のものであったが、明治二二年以後は廃止された。

なお地租は当初地価の百分の三であったが各地で起きた地租改正反対運動などにより明治一〇年に百分の二・五に減租せざるを得なかったため、その旨明記されている。

一一一 [明治三年須乗村貢税割附]

(表紙)

「年 割 附

磐城国白河郡

須乗村

年貢税可納割付之事

磐城国白河郡

須乗村

卯より子迄十ヶ年定免

一反別二十四町四反三畝二十一歩

此高が百六十石五斗三升九合

此訳

田反別十六町二反四畝十八歩

此高二百四石三斗七升二合

内

反別一町九反八畝二十三歩前々他代堀代引

此高二十石七斗五升六合

外反別一町五反六畝二十七歩 前々手余荒地より当年起返

此高十九石四斗七升一合

残反別十四町二反五畝二十五歩

此高百八十三石六斗一升六合

此貢米六十五石四升八合

内米三十六石三升三合

内米一斗三升五合

米一石六斗二升四合

米三十四石二斗七升四合

内訳

反別十町四反七畝十二步

此高百三十八石七斗九升二合

此貢米六十石八斗三升八合

内米十四石二斗七升四合 破免立戻増

反別一町五反六畝七步

此高十九石四斗七升一合

此貢米一石六斗二升四合

畑反別八町一反九畝三步

此高五十六石一斗六升七合

内

反別五畝步

此高三斗四升

当年起返取下

皆増

前々郷藏敷引

反別三町八反四畝二步

此高二十四石七斗七升五合

前々手余荒地引

反別一町六反三畝十六步

此高十七石八斗一升三合

起返取下

此貢米一石九斗二升六合

内米一斗二升

免上増

小以反別三町八反八畝二步

此高二十五石一斗一升五合

反別五反八畝步

此高七石五斗四升

文久元酉
起返取下

残反別四町三反一畝一步

此高三十一石五升二合

此貢米六斗六升

内米一升五合

免上増

此貢米十二石三斗六升九合

内

反別三町七反六畝一分

本免

此高二十八石七斗七升七合

此貢米十二石九升四合

外

掛高百五十六石三斗三升九合

外高四石二斗 前々石掛

反別五反五畝歩

卯起返取下

高二石五斗二升二合 新田高除之

此高二石二斗七升五合

一米一斗二升八合

鷹餌犬米

此貢米二斗七升五合

一米七十八文七分

糠代

右同断

一米七十六文五分

藁代

一反別三畝十八歩

皆田 同所新田

一米百十五文八分

薪代

此高三斗九升七合

一米六十四文四分

萱代

此貢米五升三合

一米二十文三分

葭代

内米六合

破免立戻去已増

一米七十三文三分

下刈日雇代

右同断

一米三十文七分

漆木代

一反別二反五畝歩

皆田 同所新田

一米九文四分

柿渋代

此高二石一斗二升五合

午より戌迄五ヶ年季

此貢米二斗三升九合

破免立戻去已増

一米百三文

醬油造運上

貢合米七十七石七斗九合

内永五文 切替増

一米二十三文七分

一ヶ年 請水車運上

内米三拾八石八斗五升四合五勺

一米三十九文四分

醬油造運上

永十二貫六百四十七文九分

一米六十三文

油筒運上

此米三十八石八斗五升四分五勺

一米百二十五文

年々増減

獵師運上

一米一斗五升八合

伝馬宿入用

掛高百六十一石六升一合

外高百二石 助郷高除之

一米三斗二升二合

六尺給米

掛高外高右同断

一永四百二文七分

藏前入用

納合米三十九石四斗六升二合五勺

永十三貫八百七十三文八分

右者当年定免貢稅書面之通候条村中大小之百姓入作之もの迄不殘
立会無甲乙割合之来ル極月十日限急度可令皆濟もの也

明治三庚午年十月

白河県庁圖

右村

名主

組頭

長百姓

〔須乘 酒井正敏家文書〕

一一二〔明治六年須乘村貢稅割附〕

(表紙)

「癸酉割賦帳

白河郡 須乘村」

癸酉貢稅割賦之事

卯ヨリ子迄十ヶ年定免

磐城国白河郡

須乘村

一反別二十四町四反三畝二十一步

此 訳

田反別拾六町二反四畝十八歩

内反別一町九反八畝二十三歩

前ニ池代掘代引

殘反別十四町二反五畝二十四歩

此貢米六十五石四升八合

去 同

内 訳

反別十町四反七畝十二歩

本 免

此貢米六十石八斗三升八合

反別一町六反三畝十六歩

此貢米一石九斗二升六合

免下起返

反別五反八畝歩

文久元酉

此貢米六斗六升

免下起返

反別一町五反六畝二十七歩

此貢米一石六斗二升四合

午免下起返

畑反別八町一反九畝歩

内 反別四畝歩

前ニ郷藏敷引

一金四錢

申より已迄十ヶ年季

水車税

反別三町六反五畝二歩

前ニ手余地荒地引

一金二十五錢

申より已迄十ヶ年季

質屋税

小以反別三町六反九畝二歩

一金三錢一厘

無年季

漆木税

残反別四町五反一歩

米七十七石八斗七升一合

此貢米十二石五斗三升一合 去 同

納合 金三十二錢一厘

内 訳

反別三町七反六畝一歩

本 免

右者癸酉貢稅書面之通候条米二月二十八日限無相違可致上納もの

此貢米十二石九升四合

也

明治六年十一月

福島県令

安場 保 和 團

反別五反五畝歩

卯免下起返

〔須乘 酒井正畝家文書〕

此貢米二斗七升五合

反別一反九畝歩

未より亥迄五ヶ年季

一三三〔明治七年須乘村貢稅割附〕

季此貢米一斗六升二合

未免下起返

(表紙)

右同断

「甲 戌 割 賦 帳

一反別三畝一八歩

皆田 同所 新田

磐城国白河郡

此貢米五升三合

須乘村

右同断

須乘村

一反別二反五畝歩

皆田 同所 新田

一反別二十四町四反三畝二十一歩

此貢米二斗三升九合

此 訳

貢合米七十七石八斗七升一合

田反別十六町二反四畝十八歩

外

内

反別一町九反八畝二十三歩 前ニ池代堀代引

殘反別十四町二反五畝二十五歩

此貢米六十五石四升八合

内

反別十町四反七畝十二歩

本 免

此貢米六十石八斗三升八合

反別一町六反三畝十六歩

免下起返

此貢米一石九斗二升六合

反別五反八畝歩

文久元西
免下起返

此貢米六斗六升

反別一町五反六畝二十七歩

午免下起返

此貢米一石六斗二升四合

畑反別八町一反九畝三歩

反別四畝歩

前ニ郷藏敷引

内反別三町六反五畝二歩

前ニ手余荒地引

小以反別三町六反九畝二歩

殘反別四町五反一歩

此貢米十二石五斗三升一合

内

反別三町七反六畝一歩

本 免

此貢米十二石九升四合

反別五反五畝歩 卯免下起返

此貢米二斗七升五合

反別一反九畝歩

未より亥迄五ヶ年季
未免下起返

此貢米一斗六升二合

一反別三畝十八歩 皆田 同所 新田

此貢米五升三合

一反別二反五畝歩 皆田 同所 新田

此貢米二斗三升九合

貢米合七十七石八斗七升一合

外

一金三錢一厘 無年季 漆 木 税

一金四錢 申より巳十ヶ年季 水車免許税

一二十五錢 右同年季 質屋免許税

納合 米七十七石八斗七升一合

金三十二錢一厘

右甲戌年地租雜稅書面之通候也

明治八年一月 福島県令 安場 保 和 圃

〔須乘 酒井正敏家文書〕

一四〔明治八年須乘村地租割附〕

(表紙)

「乙亥地租割賦帳

磐城国白河郡

須乘村

未ヨリ丑迄七ヶ年定免

一反別二十四町四反三畝二十一步

須乘村

此 訳

田反別十六町二反四畝十八歩

内反別一町九反八畝二十三歩 前々池代堀代引

残反別十四町二反五畝二十五歩

此貢米六十五石四升八合

内 訳

反別十町四反七畝十二歩

本 免

此貢米六十石八斗三升八合

反別一町六反三畝十六歩

免下起返

此貢米一石九斗二升六合

反別五反八畝歩

文久元酉
免下起返

此貢米六斗六升

反別一町五反六畝二十七歩

午免下起返

此貢米一石六斗二升四合

畑反別八町一反九畝三歩

内

反別四畝歩

前々郷藏敷引

反別三町六反五畝二歩

前々手余荒地引

反別三町六反九畝二歩

残反別四町五反一歩

此貢米十二石五斗三升一合

内 訳

反別三町七反六畝一歩

本 免

此貢米十二石九升四合

反別五反五畝歩

卯免下起返

此貢米二斗七升五合

反別一反九畝歩

未ヨリ亥迄五ヶ年季
未免下起返

此貢米一斗六升二合

一反別三畝十八歩 皆田

此貢米五升三合

一反別二反五畝歩 皆田

此貢米二斗三升九合

貢合米七十七石八斗七升一合

右者乙亥地租書面之通候也

明治九年二月

福島県参事 山 吉 盛 典 印

〔須乘 酒井正敏家文書〕

一一五〔明治六年中野目村雜稅皆濟目録〕

癸酉雜稅目録

石川郡 中野目村

反別三十町七畝步

一米百四十三石三斗七升五合 正租

内

米七十一石六斗八升七合五勺

此代金三百三十六円五十二錢三厘

高金三百三十六円五十二錢三厘

米七十一石六斗八升七合五勺

此代金五十三円六十七錢三厘

外金二百八十二円八十五錢 甲戌一ヶ年免除

掛米百四十三石三斗七升五合

一米八石六斗三合

口米

内

米四石三斗一合五勺

此代金二十円十九錢三厘

(表紙)

一一六〔明治七年中野目村貢稅皆濟目録〕

明治七年

皆濟目録

石川郡 中野目村

明治七年皆濟目録

磐城国石川郡

中野目村

高金二十円十九錢三厘

米四石三斗一合五勺

此代金三円二十二銭

外金十六円九十七銭三厘

掛米七十一石六斗八升七合五勺

一米一石四斗三升四合

此代金六円七十三銭二厘

掛米四石三斗一合五勺

一米八升六合

此代金四十銭四厘

掛米一石四斗三升四合

一米四升三合

此代金二十銭二厘

即納合金四百二十円九十四銭七厘

右者甲戌貢稅皆濟目録書面之通候也

明治八年五月

甲戌一ヶ年免除

正租出目米

口米出目米

出目米口米

一一七〔明治七年中野目村雜稅皆濟目録〕

甲戌雜稅目録

新キ
一金十七銭

大工職

石川郡 中野目村

一金十五銭

下田 谷由藏
屋根葺職

新キ
一金六十銭

綿打職

此弓四

大木友之助

巴谷善兵衛

同
一金三十八銭五厘

紺野職

小針清助

此瓶十一

大木 政吉

一金四十五銭

水車稅

此臼十

巴谷善右衛門

一金七銭九厘

山手銭

掛金一円八十三銭四厘

口金

一金五銭五厘

右村

合金一円八十八銭九厘

用掛

惣百姓

右者昨甲戌雜稅令皆濟ニ付一紙目録相渡者也

〔中野目 巴谷善人家文書〕

明治八年八月 磐前 景園

右村用掛

第5編 近代 1政治

十二月十一日

一金四円七十五銭

一同三円七十二銭五厘

一金十五円四銭八厘三毛

内

藤井辰治郎

一金八円四十七銭五厘

内

薄羽栄作

第十八号

十二月十一日

一金四円七十五銭

一同三円七十二銭五厘

一金三十七円八十八銭二厘

内

藤井重次

第二十号

十二月十一日

一金八円四十三銭

一同六円六十一銭八厘三毛

一金十九円五十七銭一厘三毛

内

藤井長十

一金十一円七十八銭六厘三毛

内

藤井重助

第一号

十二月十日

一金十円九十四銭

一同八円六十三銭

一金二十三円三十銭三厘八毛

内

鈴木栄藏

第十六号

十二月十一日

一金六円六十三銭

一同五円十五銭六厘三毛

一金十七円三十銭九厘五毛

内

藤井金十郎

第二号

十二月十日

一金十三円六銭

一同十円二十四銭三厘八毛

第二十号

十二月十日

一金九円六十九銭

一金七円六十一銭九厘五毛
一金十二円七十一銭七厘五毛

円谷 福四郎

第十九号

十二月十一日

第十五号

十二月十一日

一金七円十三銭

一同五円五十八銭七厘五毛

一金十二円七十銭七厘五毛

藤井 重三郎

第十号

十二月十一日

一金十二円十九銭

一金九円六十三銭一厘三毛

一金十六円九十五銭

鈴木 利助

第十四号

十二月十一日

一金七円十二銭

一同五円五十八銭七厘五毛

一金十三円八十七銭七厘五毛

藤井七郎右衛門

第四号

十二月十一日

一金九円十銭

一七円四十五銭

一金十七円十三銭

藤井 新左衛門

第十三号

十二月十一日

一金七円八十三銭

一同六円八銭七厘五毛

一金十六円九十五銭

薄羽 辰蔵

第三号

十二月十日

一金九円六十三銭

内

内

内

内

一 七円六十銭

一金十六円九十五銭

内

第八号

十二月十一日

一金九円十銭

一 七円四十五銭

一金十六円九十五銭

内

第六号

十二月十日

一金九円十銭

一同七円四十五銭

一金十六円九十五銭

一金九円五十銭

一同七円四十五銭

一金三百五十一円五十八銭二厘

内

一金百九十七円

一金百五十四円五十八銭 厘

鈴木 勲之丞

藤井 亀藏

鈴木 令三郎

用掛 円谷 重左衛門

明治八年十二月

磐城県権令 村上光雄殿

〔町有文書〕

解説 一一一〜一二〇まで、矢吹の村々の明治初年から九年までの貢税・地租の資料を載せた。紙頁の関係でごく一部に限った。

明治政府は、明治一年いわゆる三新法の公布まで、地方制度の上ではたびたび大変革を行ったが、租税制度については、旧幕時代の諸制度がそのまま残されていたことがわかる。磐前県・福島県の管轄での違いなど中央で布達してもそのまま実施されていなかった。

地租・税制については、新旧入り混り不統一であったことがわかる。

一一一 〔明治一二年三城目村地方税地価割賦課取立帳〕

(表紙)

「 明治十二年十一月

地方税地価割賦課取立簿

西白河郡三城目村 須乗村 戸長役場

西白河郡三城目村

地価四百五十円十九銭八厘

十一月二十日

一金四十二銭八厘

地価二十一円十三銭一厘

小針 芳右衛門

一金二錢

小針甚右衛門

一金四十七錢七厘

佐久間 藤四郎

地価六百十八円二十一錢五厘

地価五十九円七十五錢

十一月十七日

一金五錢七厘

景政寺

一金五十八錢七厘

赤塚 静衛

地価百七十七円四十四錢二厘

十一月十九日

一金十六錢九厘

景政寺 惣代持

地価六百六十六円九十九錢

地価四百六十三円五十二錢五厘

一金六十三錢四厘

小林 藤藏

一金四十四錢

伊藤 忠助

地価五百八十五円八十錢一厘

地価五百五十四円二十八錢二厘

十二月一日

十一月十八日

一金五十五錢七厘

泉川 文右衛門

一金五十二錢七厘

太田 栄十

地価四百五十八円七十六錢

地価二円九十一錢四厘

十一月二十日

一金三厘

太田 栄十 外一人

一金四十三錢六厘

太田 久之助

地価四百三十二円六十四錢七厘

地価百拾四円五十六錢五厘

十一月二十五日

十一月十八日

一金四十一錢一厘

伊藤 忠藏

一金十錢九厘

太田 初三郎

地価六円五錢六厘

大輪 志津衛

地価五百三十七円六十九錢

地価五百三十一円四十八錢

十一月十九日

十一月十八日

一金五十一錢一厘

小林 忠吉

十一月十八日

浅川 音松

地価五百一円九十六錢九厘

一金五十錢五厘

十一月二十三日

地価二百五十九円六錢八厘

地価四百四十一円五錢六厘

十一月十七日

一金四十一錢七厘

地価四百七十三円六十錢三厘

十一月十九日

一金四十五錢

地価五百九十九円七十三錢四厘

十一月十九日

一金五十七錢

地価八十九円四十七錢四厘

十二月十五日

一金八錢五厘

地価十三円三錢七厘

十一月十九日

一金一錢三厘

地価四百六十三円八十一錢六厘

十一月二十日

一金四十四錢一厘

地価百六十一円二十錢二厘

一金十五錢三厘

地価七百十九円九錢九厘

十二月十日

一金六十八錢三厘

地価四百五十一円六十四錢四厘

十一月二十一日

一金四十二錢九厘

地価八十七円三十二錢

一金八錢三厘

地価三百七十八円七錢

十一月十八日

一金三十五錢九厘

地価五百五円九十八錢五厘

十一月二十一日

一金四十八錢一厘

十二月十日

地価三百八十四円三錢三厘

一金三十六錢五厘

地価九円四十四錢四厘

一金九厘

地価四百八十八円十六錢三厘

十一月十九日

一金四十六錢四厘

伊藤 重郎治

石川郡双里村

水野 久右衛門

加藤 小市

降 矢 卯 吉

佐久間 馬之丞

降 矢 金之助

関 根 庄 吉

諸 根 倉 太郎

第5編 近代 政治

| | | | | | | |
|----------------|---------|----------|---------|---------|----------------|-------|
| 地価六百七十二円九十七銭一厘 | 十一月二十一日 | 一金六十三銭九厘 | 渡辺金蔵 | 十一月二十六日 | 一金四十四銭四厘 | 松山栄太郎 |
| 地価二十四円四十三銭七厘 | 十一月二十一日 | 一金二銭三厘 | 諸根源蔵 | 十二月六日 | 地価五百七円九十九銭九厘 | 堀井丑蔵 |
| 地価五百四十三円八十七銭九厘 | 十一月十九日 | 一金五十一銭七厘 | 関根紋三郎 | 十一月十九日 | 地価四百八十七円七銭六厘 | 関根平吉 |
| 地価三十一円三十一銭四厘 | 十一月十九日 | 一金三銭 | 外関根二紋三名 | 十一月十八日 | 地価四百九十七円四十五銭二厘 | 松山直之助 |
| 地価四百六十五円九十四銭一厘 | 十二月二十二日 | 一金四十四銭三厘 | 三瓶伝之助 | 十二月四日 | 地価四百七十九円六十七銭二厘 | 関根皆吉 |
| 地価四百七十六円八十四銭三厘 | 十一月十八日 | 一金四十五銭三厘 | 三瓶栄吉 | 十一月十七日 | 地価四百五十八円八十五銭四厘 | 関根紋蔵 |
| 地価十三円一厘 | 十一月二十日 | 一金一銭三厘 | 村上初太郎 | 十一月十九日 | 地価五百四十五円五十三銭九厘 | 関根金作 |
| 地価四百六十七円十四銭五厘 | | | | 十一月十九日 | 地価四百八十八円六十四銭 | |

十一月十八日

一金四十六錢四厘

地価六百九円十二錢一厘

十一月十九日

一金五十七錢九厘

地価四百六十四円二十一錢六厘

十一月二十六日

一金四十四錢一厘

地価四百五十七円八十七錢二厘

十一月二十二日

一金四十三錢五厘

地価四百八十八円九十一錢九厘

十一月二十日

一金四十六錢四厘

地価四百六十二円六錢八厘

十一月二十日

一金四十三錢九厘

地価四百九十九円四錢八厘

十一月十九日

一金四十七錢四厘

地価四百八十七円八十五錢四厘

十一月二十一日

堀井 鉄藏

一金四十六錢四厘

地価四百二十七円四十九錢六厘

十一月十七日

関根 佐治衛門

一金四十錢六厘

地価五円二十錢二厘

一金五厘

丹内 栄作

地価四百七十五円三十七錢三厘

十一月十七日

丹内 清八

一金四十五錢二厘

地価四百八十八円十九錢九厘

十一月二十七日

松山 利惣治

一金四十六錢四厘

地価四百八十四円三十四錢一厘

十一月十八日

降矢 万藏

一金四十六錢

地価三百八円九十七錢九厘

十一月二十二日

関根 直藏

一金二十九錢四厘

地価四百四十八円三十一錢二厘

十一月十七日

三瓶 重右衛門

丹内 与助

外丹 与助
十六人

丹内 忠助

丹内 福松

相楽 久助

降矢 清十

第5編 近代 1 政治

| | | | | | |
|----------------|----|--------|----------------|-----|---------|
| 一金四十二錢六厘 | | | | | |
| 地価四百七十四円五十三錢四厘 | | | | | |
| 十二月十七日 | | | | | |
| 一金四十五錢一厘 | 岩谷 | 鶴太郎 | 十一月十七日 | 佐久間 | 忠吉 |
| 地価五百五十二円三十一錢七厘 | | | 一金二十五錢 | | |
| 一金五十二錢五厘 | 矢部 | 相蔵 | 地価九円五十二錢二厘 | 外 | 佐久間一忠人吉 |
| 地価六円四十一錢二厘 | | | 一金九厘 | | |
| 一金六厘 | 外 | 矢部一相蔵人 | 地価五百三十三円二十六錢二厘 | | |
| 地価四百八十一円七十四錢 | | | 十一月十八日 | | |
| 十一月二十二日 | | | 一金五十錢七厘 | 佐久間 | 米十 |
| 一金四十五錢八厘 | 太田 | 久右衛門 | 地価五百二十四円六十七錢四厘 | | |
| 地価五円七十二錢七厘 | | | 十一月十七日 | | |
| 十二月二日 | | | 一金四十九錢八厘 | 太田 | 庄吉 |
| 一金五厘 | 小林 | 仁助 | 地価五百二十九円四十四錢一厘 | | |
| 地価四百四十円九十三錢三厘 | | | 十一月十九日 | | |
| 十一月十八日 | | | 一金五十錢三厘 | 佐久間 | 平右衛門 |
| 一金四十一錢九厘 | 小針 | 徳兵衛 | 地価三百九十九円六十四錢六厘 | | |
| 地価十円十六錢五厘 | | | 十一月十九日 | | |
| 十二月十日 | | | 一金三十八錢 | 瀬谷 | 半十郎 |
| 一金一錢 | 泉川 | 常蔵 | 地価四百三十九円三十三錢九厘 | | |
| 地価二百六十三円二十九錢七厘 | | | 十一月十七日 | | |
| | | | 一金四十一錢七厘 | 佐久間 | 亀吉 |
| | | | 地価四百八十四円一錢二厘 | | |
| | | | 十一月十九日 | | |

一金四十六錢
地価一円八錢

太田留吉

地価四百七十五円四十錢九厘

小林喜藏

一金一厘

太田留吉
外人

地価六円十九錢一厘

小林喜藏
一人

地価五百二十三円八十六錢一厘

十一月十八日

太田龜太郎

地価十九円三十一錢一厘

小林喜藏

一金四十九錢八厘

地価五円六錢九厘

太田龜太郎

一金一錢八厘

地価十一円六十二錢五厘

関根卯吉

十一月十八日

一金五厘

地価四百八十円七錢八厘

太田龜太郎
一人

地価五百十八円七十四錢七厘

十一月十七日

太田喜助

十一月二十七日

一金四十五錢六厘

地価五百五十四円二十二錢九厘

坂本長四郎

地価四百九十九円五十六錢一厘

十一月十九日

飯島惣吉

十一月十八日

一金五十二錢七厘

地価百四十円八十九錢二厘

猪合寅吉

地価五百一円六十七錢四厘

一金四十七錢七厘

飯島吉五郎

十一月十九日

一金十三錢四厘

地価千五百二十四錢八厘

猪合国右衛門

地価五十九円八十一錢八厘

十一月十七日

浅川林十郎

十一月十八日

一金九十五錢五厘

地価千五百二十四錢八厘

浅川伝六

地価十円八十五錢五厘

十一月二十一日

第5編 近代 1 政治

| | | | |
|----------------|---------|----------------|---------|
| 一金一錢 | 小林 勝吉 | 地価五百十七円五十九銭四厘 | |
| 地価三百二十七円三十一銭七厘 | | 十一月十八日 | |
| 十一月十一日 | | 一金四十九銭二厘 | 小林 友衛 |
| 一金三十一銭一厘 | 佐久間 千代吉 | 地価十三円七十三銭六厘 | |
| 地価九百六十三円九十銭七厘 | | 十二月二日 | |
| 十一月十八日 | | 一金一銭三厘 | 浅川 与平治 |
| 一金九十一銭六厘 | 小林 丑太郎 | 地価七百五十六円四十七銭三厘 | |
| 地価四百八十三円十八銭一厘 | | 十一月十九日 | |
| 十一月十七日 | | 一金七十一銭九厘 | 小林 勝太郎 |
| 一金四十五銭九厘 | 小林 周助 | 地価三十八円十六銭六厘 | |
| 地価五百十三円五十銭六厘 | | 十一月十八日 | |
| 十一月二十二日 | | 一金三銭六厘 | 小林 己藏 |
| 一金四十八銭七厘 | 小針 国十 | 地価三百十六円五十九銭三厘 | |
| 地価四百六十円三十三銭六厘 | | 地価十八円九十二銭八厘 | |
| 十二月十六日 | | 十一月二十一日 | |
| 一金四十三銭七厘 | 小針 丹藏 | 二口合計 | |
| 地価四百三十七円九十銭一厘 | | 一金三十一銭九厘 | 澄江寺 惣代持 |
| 十一月二十二日 | | 地価四百五十八円四十二銭三厘 | |
| 一金四十一銭六厘 | 泉川 仲吉 | 十一月十九日 | |
| 地価五百二十七円六十九銭 | | 一金四十三銭五厘 | 浅川 久次郎 |
| 一金五十銭一厘 | 浅川 林藏 | 地価五百四十円九十二銭八厘 | |

十一月十九日

一金五十一錢四厘

地価四百二十一円六十六錢五厘

十一月二十一日

一金四十錢一厘

地価千三百五十円十四錢二厘

十一月十九日

一金一円二十八錢三厘

地価六百四十三円二十二錢二厘

十一月十九日

一金六十一錢一厘

地価千三百五十一円九十五錢四厘

十一月十七日受取

一金一円二十八錢四厘

地価五百一円三十六錢八厘

十一月十九日

一金四十七錢六厘

地価六百二十円二十五錢八厘

十一月十八日

一金五十八錢九厘

地価五百九十二円三十三錢三厘

十一月十七日

一金五十六錢三厘

地価七百五十九円九十四錢四厘

十一月十九日

一金七十二錢二厘

地価百七十六円四十五錢五厘

十三年一月二十四日

一金十六錢八厘

地価五十一円六十二錢一厘

一金四錢九厘

地価三百十八円十八錢七厘

十三年二月八日

一金三十錢二厘

地価五百六十三円四十錢一厘

十一月二十一日

一金五十三錢五厘

地価四百九十八円六十九錢

十一月二十一日

一金四十七錢四厘

地価百四十一円二十九錢五厘

一金十三錢四厘

泉川 銀治

関根 寅之助

降矢 泰藏

堀井 健藏

小林 春吉

佐久間 作藏

佐久間 作藏

城見寺 惣代持

一金一円二錢二厘

地価三百七十五円五十九錢三厘

一金三十五錢七厘

地価七円四十七錢六厘

一金七厘

地価四百四十二円三十錢五厘

一金四十二錢

地価六円二十八錢五厘

一金六厘

地価五十七円四十三錢一厘

一金五錢五厘

地価百十一円二十五錢六厘

一金十錢六厘

地価三百四十八円二十一錢九厘

十二月十四日

一金三十三錢一厘

地価三十四円八十四錢六厘

一金三錢三厘

地価三十円四十一錢九厘

十二月十日

一金二錢九厘

一村惣持惣代人
矢部 相藏

浜尾村
山川 門十郎

加降
藤矢 恭藏
小市

小高村
溝井 六右衛門

加久藤
佐久間 力藏
小市

小高村
矢吹 嘉三郎

小高村
首藤 久太郎

中ノ目村
円谷 善右衛門

小高村
溝井 庄兵衛

伊藤 重郎治

地価五十九円七十錢四厘

一金五錢七厘

地価二百七円五十九錢四厘

十一月

一金十九錢七厘

地価五十九円九十錢五厘

一金五錢七厘

地価六十四円九十七錢七厘

一金六錢二厘

地価十七円九錢八厘

一金一錢六厘

地価六円八十二錢五厘

一金六厘

地価十四円六十九錢四厘

一金一錢四厘

地価百二十五円四十五錢九厘

一金十一錢九厘

地価百二十五円八十七錢七厘

一金十二錢

地価百十円二十二錢八厘

一金十錢五厘

小高村
溝井 滿之助

竜崎村
小林 維光

須乘村
松谷 儀右衛門

小高村
添田 周助

大畑村
関根 嘉市

関根佐治右衛門
小林 健次郎

外 林 十八
瀬根佐治右衛門
外 谷 半十郎

小 林 藤藏
外 林 九藏

猪合 又藏
外 九藏
伊藤 重郎治

第5編 近代 1政治

地価百二十八円八十四銭八厘
 一金十二銭二厘
 地価百十八円九銭六厘
 一金十一銭二厘
 地価百二十八円十四銭三厘
 一金十二銭二厘
 地価百三十五円三十銭
 一金十二銭九厘
 地価百三十五円五十一銭三厘
 一金十二銭九厘
 地価百三十六円九十三銭五厘
 一金十三銭
 地価百三十四円十三銭八厘
 一金十二銭八厘
 地価八十二円三十八銭二厘
 一金七銭八厘
 地価七十七円五十四銭九厘
 一金七銭四厘
 地価八円十銭
 一金八厘
 地価二十四円八十五銭二厘

堀井 丑蔵
 関根 佐治 右衛門
 瀬谷 九半十郎
 外 田 九 龜太郎
 浅川 九 久次郎
 小林 健治郎
 諸根 庄平
 渡辺 寅松
 佐久間 千代吉
 泉川 源五郎
 景久間 政多 寺吉

一金二銭四厘
 地価二百十九円八十六銭二厘
 十三年二月七日
 一金二十銭九厘
 地価九十三円三十六銭六厘
 一金八銭九厘
 地価百八十二円六十八銭二厘
 一金十七銭四厘
 地価五十円四十五銭四厘
 一金四銭八厘
 地価八十八円五十八銭八厘
 一金八銭四厘

坂路 平吉
 成田村 田品 蔵
 須賀川村 真船 清蔵
 神田村 藤井 直次
 神田村 藤井 源助
 須乗村 坂路 宗助
 (町有文書)

解説 明治一一年以後、従来混然としていた租税制度が整えられてきた。従来の民費中より、区町村費に属するものを除き、これに従来の府県税を加え「地方税」と称した。これは府県の費用に当てることとし、地方税は、地租割、営業税、雑種税、戸数割により徴収した。各村は各戸ごと「取立帳」をつくり徴収に当った。